

II-C-1

随証漢方療法と芍薬甘草湯との併用による不妊治療

南多摩病院

○村田高明

目的：演者は15年前より、不妊症に漢方療法を行い現在まで妊娠成功例は273例に達した。当初は婦人薬といわれる当帰芍薬散、桂枝茯苓丸、加味逍遥散や桃核承気湯などを用いた。次第に漢方医学理論を知るにおよび、随証療法を行い、数年後には累積妊娠成功例は28例に達した。その後の数年間は、随証療法と共にホルモン療法の併用を行い累積妊娠成功例は141例に達した。しかし、この間に温経湯のLH・RH賦活作用や芍薬甘草湯のSteroid調整作用によるTestosteroneとProlactinの正常化の研究が報告され、漢方療法の幅が広がったともいえる。芍薬甘草湯の投与はTestosteroneやProlactin値が指標であるため、漢方療法とはいえない。そこで、不妊患者の漢方医学の病状を促えた、いわゆる随証療法を行い、併せて芍薬甘草湯を用いたところ、妊娠成功例は累増した。

方法：不妊患者の血中ホルモン測定を排卵日以前に施行。FSH/LH比 >2 、Testosterone 0.7 ng、Prolactin 20 ng/ml以上、および多毛の著しい症例に芍薬甘草湯を投与し、併せて随証療法を行った。

結果：昭和62年9月から平成2年3月までの2年6か月間に、妊娠成功例は90例であった。その内、49例は芍薬甘草湯を単独（8例）、或は併用（41例）であった。芍薬甘草湯を併せて用いた随証の漢方薬は多いものから桂枝茯苓丸11例（26.8%）、当帰芍薬散8例（19.5%）、当帰四逆加呉茱萸生姜湯6例（14.6%）、温経湯4例（9.7%）、加味逍遥散3例（7.3%）、防風通聖散2例（4.8%）、温清飲2例（4.8%）、四物湯2例（4.8%）、苓姜朮甘湯2例（4.8%）、補中益気湯1例（2.4%）であった。

考案および結論：機能性不妊の場合でも、漢方医学の立場からみると八綱や気血水弁証で、その異常性をみることができ、いわゆる随証療法による漢方薬の選択ができれば有効な手立てになる筈である。しかしながら、漢方療法による不妊治療も依然として明確性に乏しく、また有効率も低い。そこで柳沼が報告した芍薬甘草湯の効果を応用し、随証療法で選択した漢方薬に芍薬甘草湯を併用する治療を行ったところ好成績を得た。